福祉体験学習を通じて

望月中学校　三年　髙柳　望

私は、今年の学習の中で最も考えさせられた件について発表します。それは、福祉体験学習を通じて考えた「福祉」についてです。「福祉」という言葉は小さい頃からニュース等で耳にする機会がありましたが、高齢者福祉、障害者福祉、これらのものは、専門的な知識や技能がなければ難しく、私たちにとってはあまり身近なものではないと感じていました。

望月中学校では、七月二十四日に福祉体験学習が行われました。福祉体験学習では、目と耳の不自由な方を講師としてお招きし、アイマスク体験や手話体験を行いました。アイマスク体験では、アイマスクを着用し、校舎の中を目の見えない状態で歩きました。これは視覚障害者の疑似体験です。私は介助者として腕を支えてくれた友だちを信用しきれずにいたため、一歩を踏み出すことがとても怖く感じましたが、私のことを考え、細かに状況を説明してくれる友だちの声がけにより、安心して歩けるようになっていきました。視覚障害者の方の苦労を実感すると同時に、手助けなどの支援の必要性を強く感じました。

手話体験では、二名の講師の先生方に手話を教えていただきました。「単語」からその言葉を表す手話を考える活動を行いました。すると案外、手話の動作が、日常生活で使う動作と似ていることがわかりました。耳の不自由な方に声をかけるときは、たとえ手話を詳しく分からなくても、熱心に動作や口の動きで伝えようとすることが大切だと感じました。

この体験を通して得た私の考えを二つ発表します。一つは、私たちが何気なく行っている日常生活は、とても幸せなことであるということです。自分たちにとっては当たり前に行っていることも、他の人にとってはそうでないことはたくさんあることを知りました。学校に通えること、趣味を楽しめること、中学校生活は残り少なくなってきましたが、毎日の生活に感謝を持って大切に過ごしていきたいと思います。

二つ目は「障害者福祉」に対する私自身の心のハードルが、よい意味で下がったことです。手話などの専門的な知識や技能は、支援する上で、もちろん大切だと思いますが、「まずは相手の立場に立つこと」を意識して自分から積極的に声をかけていくことが大切だと強く思いました。

福祉には「幸い」という意味があると今回学びました。誰にとっても「幸い・幸せ」な世の中になってほしいということだと思います。まず、自分の周りから、自分に関わった人が「幸い・幸せ」であるよう、これから私自身が気持ちのよい人になり、高校、社会人へと成長していきたいと思います。